王様の
パラレルワールド

王様のパラレルワールド

余は、小さいながら一国一城の主である。
整然とした我が国には、パラレルワールドが12個存在する。

主としては、パラレルワールドのすべてを把握しておかなくてはならないので、
余は、頻繁に視察に出かけることにしている。

本日の視察予定は、パラレルワールド３層目だ。
この３層目の世界は、かなりうまく回っており、とても清潔な世界である。
民は平和主義であり、常に会話と微笑みであふれている。

余は満足である。

しかし、先日視察に訪れた12層目の世界はひどいものだった。
その世界の民は、あいさつというものをどこかに忘れてきてしまったようだった。
頻繁にガラス窓が割られたり、あちこちの窓から罵声もよく聞こえてくる。
ついに、12層目の世界を抜け出そうとして、空へ飛び出す者さえいた。
その者は、違うパラレルワールドに移動できず、異次元空間で彷徨うことになってしまった。

余は非常に残念である。

明日はどの階層を視察に訪れようか。
その世界が平和で美しいことを願っているが、
それはそこに生きる民が選ぶ道。
余はそれをコントロールしようとは思わぬ。
さて、今日はもう休むことにしよう。

TV＜今日のニュース一番しぼり！＞

アナウンサー：
「先日高層マンションの12階から飛び降り自殺のあった事件の続報です。
どうやらこのマンションの住人は、妙な霊現象によく遭遇していた模様です。
霊能者に同行してもらって取材した映像をご覧下さい。」

霊能者：

「ええ、なにやら黒い影が見えます。
この霊は、ボタンを押すのが好きなようです。
…なになに？……パラレルワールドへ行くスイッチですか。
自分のことを王様か何かだと思っている霊のようですね。
霊さん、霊さん、あなたが移動手段だと思っている乗り物はね、
エレベーターって言うんですよ。
さあ、お迎えが来ましたよ〜、成仏しましょうね。」

透明人間

わお！
オレ透明じゃん！
やったぜ〜！
透明人間になれたよ〜！
女湯とか覗き放題だぜ〜！
あはは！
何からやろうか〜

まずは、
ほんとにバレないかどうか確かめないとな。
母ちゃんの目の前に立ってみよう。
目の前で手を振っても全然気付かないみたいだ。
なんだよ、誰と話してるんだか、さっきからず〜っと電話してるし。
ま、いいさ、やったね！大成功じゃん！
オレって天才！

次は、片思いだったあの娘の家に忍び込んじゃおう〜
お、意外にこざっぱりしてんなぁ。
もっとぬいぐるみとかいっぱいあるのかと思ったんだけどな。

料理中だな、そのエプロンがいいね〜
あ、誰か来た、やべ！
ってオレ、別に隠れる必要ないんだった、あはは。

なんだ、男かよ…
彼氏…？ではなさそうだな。
ふたりでなんだか相談してるみたいだけど、
あれ？彼女泣いてる…？
ちっ！おれが透明じゃなかったら、この男ぶっとばしてやるのに。

あ〜なんか面白いことできね〜かなぁ。
銀行強盗してみるか！
いや、強盗じゃないよな。
誰にも気付かれないんだから、誰かを脅す必要もないし。
ん〜、でもオレが透明でも、札束は透明じゃないんだから、
ふわふわと金が浮いて移動してたら、やっぱバレるよな…

よっしゃ、密航だ！
飛行機に乗って世界一周するぜ〜！

>>>世界一周中>>>

ふぅ〜
世界ってのは広いもんだなぁ。
オレが知らない風景や、びっくりするような常識がいっぱいあるもんだ。

そろそろ家に帰るか。

>>>帰宅>>>

なんだ？葬式？
オレがいない間に誰か死んだのかよ？
母ちゃん、ただいま！
って、オレ透明なんだった〜〜！
うーん、どうやって元に戻ればいいんだよ。
っていうか、オレ、そもそも、どうやって透明になったんだっけ…？
透明になる直前、オレは…
バイクでツーリングに出かけていて…

…
…
…
うおぉぉぉぉぉぉぉぉっっっ！！
事故に遭ったんだよ〜
オレ死んでるのか〜〜〜？！
オレの葬式なのか〜〜〜〜〜？！
だから肉体がないのか〜〜！

ってことは…
…
…
…
…
…
やっぱり、女湯覗き放題じゃん！！
やったぜ〜〜〜！
幽霊ばんざ〜い！

「檻」からの脱出

おいら、いつからここにいたんだろう…？
気がついたらとても小さな部屋にいた。
たぶん「檻」と呼ばれる場所だと思う。

部屋にはおいらしかいない。
時々、壁の向こうから、誰かが話しかけているような気がするけど、
何を言っているのかおいらには聞き取れなかった。

お腹がすくと、
誰かが飯を運んできてくれた。
おいらの担当はひとりじゃないらしい。

おいらは、そのうちのひとりの女性に恋をした。
彼女が飯を運んできてくれるのが待ち遠しくて、
違う人の時はがっかりだが、
彼女が来た時には、最高の笑顔で話しかけてみたさ。
彼女はとても優しく接してくれた。
たぶん、彼女もおいらに好意を持っていたはずだ。
だけど、彼女は決しておいらの部屋には入って来なかった。
そりゃそうだよな…檻だもんな。

ある日、なぜか、
本当に突然、おいらはその檻から出ることができた。
車に乗せられて、どこか違う場所へ移動させられるらしい。
だけど、誰も何の説明もしてくれなかった。
あの彼女はほんの少しだけ悲しそうな顔をして、
それから、最高の笑顔で見送ってくれた。

車を降りて、連れていかれた場所は、
思いのほか広い、明るい、とても気持ちのいい部屋だった。
「檻」じゃなさそうだ。
そして、何よりひとりぼっちじゃなかった。

車を運転していた女性がその部屋で一緒にいてくれるらしい。
監視役ってことか…。
ただ、言葉が通じなかった。
彼女はしきりにおいらに話しかけてくれたし、
おいらも一生懸命伝えようとしたが、
どうしても意思の疎通が図れなかった。
時間をかけるしかなさそうだ。

そんな彼女との暮らしが始まって間もなく一年が経とうとしていた。
おいらは少し前から彼女とベッドを共にするようになっていたが、
相変わらず、彼女の言葉はおいらには理解できなかったし、

おいらの気持ちも、彼女には伝わらなかった。
おいらは部屋の外へ出たいと思っていたが、彼女が絶対にそれを許してくれなかった。
やっぱり、ここもちょっと広いだけの「檻」なんだな。
おいらは、いったいどんな罪を犯したんだろう。まったく思い当たる節がないんだが…
誰も面会に来ないってことは、家族もおいらのことを見放しているのか…。

それでもたぶん、おいらはだいぶ、彼女のことを好きになりかけていたんだと思う。
外には出られないが、そんなに苦痛というわけでもなかった。

しかし、チャンスは突然やってきた。
ある日、宅配便かなにかがやってきてドアを開けたんだ。
彼女はちょうど着替えていて、すぐに出られなかった。
今だ！
もう無我夢中だった。宅配便の人の脇をすり抜けて、
外に出てとにかく走り続けた。

太陽がまぶしい。
風がおいらのヒゲとしっぽを優しく通り抜けていく。

遠くで彼女が叫んでいる。
「きゃ〜！誰かうちの猫をつかまえてください！」

おいらには彼女がなんて言っているのか全然理解できなかったが、
「檻」に連れ戻されるだろうことは予想がついた。

「やだぁ〜！ペットショップで買ってきた血統書付きなのに〜！」
なんだかわからないが、彼女は叫びながら泣いているようにも見えた。

自由だ！
おいらは自分の意思でどこにでも行けるんだ〜！

次の日…
自由ってのは腹が減るなぁ。

その次の日…
やっと言葉が通じるやつに出会えたけど、
そいつにひっかかれたぜ。「俺の縄張りに入るな！」って言われたよ。ちっ。

その次の日…
ああ、腹減った…。もうだめだ。
うぉっ！あぶねえじゃねえか！黒い丸い早い転がるやつに襲われそうになったぜ。
おいらはそいつを睨みつけてやったさ。逃げていったよ、ははは。

「わ！あぶなく猫をひくところだったわ！
さっさと道路を横切れば良いのに、
なぜか猫っていったん道の真ん中で立ち止まるのよね〜」

それにしても、腹減ったぜ。
あ…なんか聞いたことのある音だな…
キラキラのグラスを銀色のスプーンで叩くような音…
この音が聞こえたら、おいしい缶詰にありつけるんだよな。

おいらはふらふらしながら音のする方へ導かれていった。

「あああああ！ミィちゃん、今までどこに行っていたのよ。
本当に心配したんだから〜〜！こんなに痩せちゃって〜、
でも帰ってきてくれてよかったぁ〜〜〜」

「檻」の暮らしも悪くはないよな…。
だけど、やっぱり一度は外に出てみたいってもんだろ。
じゃないと、「檻」が快適だったなんてことに気付かないもんな。
うん、おいら、もう脱走はしないぜ。
ゴロゴロ…ゴロゴロ…

神々の牧場

「おい、今晩ヒマ？一緒に飯食おうぜ、あの幻の食材がついに手に入りそうなんだよ。」

「お、すげぇじゃん！行く行く！」

「ここしばらくはさ、ありきたりなものしか食ってなかったじゃん。
こっちの牧場では、早く成長するようにいろいろ新しい餌を与えていたのに、
さっぱり効果を感じなかったもんな。」

「確かに、まぁ育つのは早いっちゃ早いんだけどな、中身がないっていうか、
ちっともおいしいと思えなかったよなぁ。」

「あっち側の牧場はさ、ちょっと厳しい環境でも育つかなぁと思って、
ほとんど日が当たらないようにして、あまり栄養も与えなかったんだけど、意外にうまかったよな。」

「うんうん、なんていうか味が複雑で、噛めば噛むほど味が出るって感じだった。」

「今日のは特別だぜ。
いろんな牧場を定期的に移動させて育てたんだ。
しかも、こいつはそのすべての牧場で、他の家畜たちのリーダーになったんだぜ。」

「牧場は全部環境が違うし、家畜たちはみんな性格も違うのに？」

「ああ、運動能力の高いグループでは、誰にも負けないパワーを出したし、
ちょっと賢いグループに放った時も、他のやつらが一目置くようになったんだ。
大食いのグループじゃ、一番餌を食ってたし、
餌を与えないグループに放り込んだ時は、水だけで生きていやがった。」

「すげぇな、どんな環境にも適応できるなんて、完璧じゃねぇか！
こいつの遺伝子をクローン増殖させれば、もう他の家畜は必要ないんじゃねぇのか？」

「ああ、もちろんやってみたさ。
だけど、クローンじゃダメなんだ。
大事なのはDNAじゃなかったんだ。」

「ってことは何か他に大事なものがあったのか？」

「ああ、家畜たちがうまく育つために一番大事だったのは何だと思う？
経験値だよ。
環境をどんどん変化させれば、それに対処できたやつは、それだけ経験値が上がる。
経験値はDNAに書き込まれるんじゃないんだぜ。」

「どこだよ？」

「魂だよ。」

「ああ！そうか！経験値の高い魂が一番うまい！ってことか！
今までいくつも魂を食ってきたのに、気付かなかったぜ。」

「今日の魂はな、最初はオリオン座の牧場で生まれたんだよ、
その後、M78星雲を経て、太陽系の金星で長い事育てたんだ。
でも、こいつが経験値を一番上げた星はどこだと思う？」

「うーん、アンドロメダ？じゃないよな？」

「お前、知ってる？すげぇ小さな星でさ、太陽系の中にある地球って星なんだぜ。」

「ああ、知ってるよ、ほとんど地獄って呼ばれてる星だよな。」

「その地球で育てた、経験値の高い人間の魂が、もうすぐここへ届くのさ～！
とびきりの食材だよ。」

「その家畜、地球じゃなんて呼ばれてたんだ？」

「ああ、確かイエスとか言ったかな。
さぁ、やつの魂が、そろそろこっちへ上がってくる頃だな。
ツルッと踊り食いしちゃおうぜ～～！」

神々の牧場～第２章「羊たちのアセンション」

メリー「もぐもぐ、もぐもぐ。」

メー太郎「もぐもぐ、もぐもぐ。」

メリー「クシュン！」

メー太郎「おや、メリーちゃん風邪かい？くしゃみなんかして」

メリー「だって、今朝すっかりふわふわの毛を刈られちゃったのよ。寒くてたまらないわ。」

メー太郎「ああ、そうかどうりでなんかスッキリしてると思った。もぐもぐ。」

メリー「もう！あんたはどうしていつもそうなのよ！私が髪型変えても、まつげのエクステしても、
　まったく気付いてくれないし。」

メー太郎「うん、ごめん。もぐもぐ。」

メリー「ねぇ、あんたは食べることとヤルことしか興味ないわけ？」

メー太郎「もぐもぐ、もぐもぐ。」

メリー「羊ってさ、なんのために生きてると思う？」

メー太郎「食ってヤッて子孫残すためだろ、もぐもぐ。」

メリー「ほんとにそれだけなのかな。あの柵の向こうに何があるのか知りたくない？」

メー太郎「そんなこと考えたってムダムダ。
　ここにいればさ、とりあえずメシ食えるじゃん。
　安心して子育てできるじゃん。柵を出たやつはオオカミに食われるんだって聞いてるぜ。
　そりゃふわふわの毛を刈られるのは辛いけどさ、それは羊の義務でしょ。
　その代わり、柵で敵から守られて、飢えることもないんだからさ、いいじゃん。
　メリーったらもしかして欲求不満なの？後から乗っかってカクカクしてあげよっか～？」

メリー「やめてよ！もうこんな生活うんざり！
　昨日まで一緒に草を食べてたメー助が、どこに連れていかれたのか、あんたは気にならないの？
　羊は死んだらどこに行くのかあたしは知りたいのよ。」

メー太郎「行いのいいヤツは天国。悪いヤツは地獄って決まってるじゃん。」

メリー「そんなおとぎ話、あんた本気で信じてるの？
　あたしは自分で確かめたいのよ。

　　あの柵の向こうに何があるのか、死んだ羊がどうなるのか、一体何のために生きているのか。」

メー太郎「またその話かよ。考えたってわかんねぇんだからよ、
　　考えるのをやめて、毎日、草食って楽しく生きて行けばいいじゃん。」

メリー「もういいわ。あたしひとりで行くから。
　　あの柵を越えて、きっと真実にたどり着いてみせるわ。さよなら。」

メー太郎「はいはい。もぐもぐ。もぐもぐ。」

〜〜〜天上の神々の会話〜〜〜

「お、ちょっと見てみろよ、こっちの牧場で、一匹アセンションした羊がいるぜ。」

「ほう、この羊、この後オオカミに食われる予定だろ？
そしたら魂の経験値上げてもらうためにさ、土星とかに生まれ変わらせようか。」

「あ、それいいかも。またちょっと個性的な魂が食えるぞ〜！楽しみだなぁ。」

天使の鬼退治

夕暮れ時、村から少し離れた道の脇の切り株に、
ひとりの旅人が腰掛けていた。

「ああ、疲れた…。もう一歩も歩けそうにないよ…」

しかし、今夜の宿も決めていない。
懐も軽く、夕食にすらありつけそうにない。
しかも、その背中には、大きな薄汚れた荷物がふたつ。

「ああ、私はどうすればいいんだろう。
世の中の悪と戦って、この国を平和にしたい、
そう思って旅に出たはずなのに、
桃太郎のように、簡単に鬼退治ってわけには行かなかった…」

一番星が見え始めた。
カラスが、山に向かって飛んで行く。

旅人は、鬼退治さえすれば、みんなが幸せになるのだと思っていた。
しかし、
旅人には、誰が鬼で、誰が鬼じゃないのか、もうわからなかった。

ある鬼は、お金が大好きだった。
お金を手に入れるために、様々な嘘をつき、善良な人からまきあげて姿をくらまし、
別な町で、また新しい嘘をついた。

また、ある鬼は、愛を欲しがった。
愛と感じられるなら、なんでもいいようだった。
常に愛の言葉を欲し、愛の表現としての貢ぎ物を欲し、
ほんの少しでも、そのものが他への愛情を示せば、裏切りと看做し、様々な攻撃をした。

また、こんな鬼もいた。
「お前のためにしてやっているんだ。おれの言うことを聞けば幸せになるが、聞かなければ不幸になるぞ」
そうやって、自分の幸せの基準を相手に押し付けて、恐怖心を刷り込む。
この鬼は、本当にやっかいだ。
あろうことか、この行動を「愛」だと信じてやっている。自分が鬼であることに気付かない…。

しかし、この国にもっともたくさん存在していた鬼は、
旅人をもっとも落ち込ませた。
彼らは、なるべく、となりの鬼と違うことをせず、目立たないように生きていた。
もし、誰かが「お金の鬼」や「愛情の鬼」にとりつかれて泣いていたら、
その被害者が自分でなくてよかった…
そう思って、遠くから見ているだけだった。

旅人は、彼らを「無関心の鬼」と名付けた。
「無関心の鬼」は、とても視野が狭かった。

おそらく自分と、その周辺しか見えていない。
遠くで起きている山火事が、自分のせいで起きていることに気付かず、
火を消そうともしなかった。
「だって、オレたち困ってないし。困ってる誰かが消せばいいんじゃね？」

もう、旅人は立ち上がることすらできなかった。
空はすっかり暗くなり、東の空からは月がのぼりはじめた。

「神様…私はもう戦えません。この国は鬼だらけです。
悪を倒せば平和な世の中になると思っていたけれど、そうじゃなかった…。
神様、私の負けです。助けて下さい」

小さくつぶやいた旅人の口元に、白いものが舞い降りてきた。
雪だ。
このまま、凍えて息絶えてしまうかと思われた。

「神様、神様、そろそろいいんじゃないですか？すっかり懲りたようですよ。もう許してあげましょうよ」
天界では、美しい羽衣をまとった天女が、神様を説得していた。
「うむ、そうじゃのう。あいつもようやく気付いたようじゃし、許してやるか。」

神様がピカピカに磨き込まれた杖を軽く一振りした。

半分雪の中に埋もれかけていた旅人は、
ハッと目を覚ました。
背中に背負ったふたつの大きな荷物を、背伸びしながら拡げると、
それは大きな白い翼となった。

ふわりと飛び上がり、天界を目指す旅人の本当の職業は「天使」だった。

眼下に広がる美しい地球を眺めながら、天使は思っていた。
「世界は、善と悪でできているわけじゃなかった。」
神様はいつも言っていたのだ。
「勧善懲悪なんておとぎ話じゃ！水戸黄門が現実なわけがなかろうが！」

「神様、私は天使として本当に未熟でした。
天から眺めるだけでなく、実際に旅をして、人と触れ合って、ようやくわかりました。
鬼たちを倒すのではなく、救うべきだったんですね。
神様、私、休暇のあとで、またがんばっちゃいますからね〜！」

人生ゲーム

A：なぁ、お前このゲーム毎日やってるけど飽きないの？

B：うん、まぁ何回やってもまったく同じ展開になるってことがなくてさ、
ついつい何回もやっちゃうんだよな。

A：今までに一体何回ぐらいやったの？

B：うーん、エンディングまで完全にクリアしたのが50回ぐらい？
途中で放置したままのセーブデータも10回ぐらいあるかな。

A：やりこんでるねー。

B：君は何回やったの？

A：おれはまぁ１回でストレートにクリアしたから、もういいかなと思って売っちゃったよ。

B：え？そりゃもったいない。こんなアナザーストーリーがあるの知らないでしょ？
これはエンディング５種類全部見た人だけがチャレンジできるやつだよ。

A：そういうのがあるってのは聞いてたけどさ、他にも新しいタイトルが次々に出るからね。
一番新しいこのゲーム「超新星開発野郎 Aチーム」、お前もやってみろよ。

B：へー！面白そうだね。でももう少しゲームする人が増えてからにするよ。
新しいゲームは攻略サイトが増えてからやらないとリスクが大きいでしょ。

A：ばかだなぁ、そのスリルがいいんじゃん！フロンティア精神だよ。
だいたいお前さ、その50回もやってる「地球転生ゲーム」でも、
攻略サイト見ながらやってるわけ？
しかも攻略サイトも３つも４つも開いてるんじゃん。
なになに、こっちが「イエスキリストを信じれば天国へのゴールは確実です」。
でこっちの攻略は「輪廻を終えて解脱することこそが人生のゴール」。
「お稲荷さんがあなたを助けてくれる」なんてのもあるの？

B：んー、でも今一番参考にしているのはこのサイトだよ。
「スピリチュアル生活で誰より早くアセンションしよう」

＊＊＊＊
何度でも、同じ星に生まれるのも自由。
違う星に違う種族として生まれるのも自由。
人間をやめて守護霊として生きるのも自由。
あなたはこの地球にいくつの過去世を持っていますか？
そしてこの先何回生まれ変わりたいですか？

考古学者の悲劇

私は古い遺跡を発掘して研究している考古学者。
歴史に残る遺跡を発掘したいと思っている。
自分が生まれる遥か以前に、一体どんな時代があったのか、何か見つけるたびにいろんな想像をして本当にワクワクする。

そしてなんとつい先日、ここには何千年も文明などなかったと思われていた土地に、とても大きな文明の痕跡を発見したのだ！
一体どんなものがそこから出てくるのか、世界中が注目する中で、私のチームは少しずつ発掘を進めていった。

かなり深く掘ったところに最初に出てきたのは、大きな壁のようなものだった。
なんということだろう、この壁には継ぎ目が見当たらないのだ。
おそらく材料は鉱物だと思われるのだが、非常に精巧に出来ており表面はとてもなめらかに磨かれている。
なんとか全貌をつかみたいと、我々は日夜掘り続けた。
しかし、それは掘れば掘るほどどんどん広がりを見せ、ついには町一つ分はあろうかと思われる巨大な建造物が姿を現した。

一体これはどんな遺跡なのだろう？権力者の墓なのか？それとも宗教儀式の施設なのか？
とにかく継ぎ目のない壁に覆われているだけで、入り口も出口もない。
壁の一部を壊して中へ入ろうと試みたのだが、とにかく厚い壁でなかなか内部に辿り着けない。
仕方なく私は、壁を壊すチームと、この遺跡の近辺を新たに調査するチームに分けて、他の痕跡を探し始めた。

それから数日経って、近辺の調査をしていたチームからうれしい報告があった。
なんと文字板を発見したというのだ。
同じ地層から発見されているので、おそらくこの巨大な遺跡と同じ時代に作られたものであろう。文字があるということは、高度な文明がかつてこの地にあったということなのだ！
人生最高の瞬間だった。私は歴史に名を残す考古学者として有名になるだろう。
私は古代の文字を専門に研究している博士に解読を依頼した。
「少し時間はかかるでしょうが、絶対に解読しますよ」
と心強い返事を頂いた。

その後もいくつもの文明の痕跡や新たな文字が発見されていき、壁を壊していたチームからも「ついに内部に通じました」と連絡が入った。なんとうれしいことだろう。

早速我々調査団は人１人がやっと入れる穴から内部への潜入を試みたのだ。
内部には、金属でできた筒状のものが大量に並べてあった。やはり墓のようだ。我々はその一体を持ち帰って詳しく調査することにした。今夜は自宅に持ち帰って眺めていよう。これは発掘者の特典だな、ふふん。

そしてその夜、ついにあの最初に発見された文字板が解読されたという連絡があった。
なんと書いてあるのだろう、王の名前か、それともこの巨大遺跡の解説なのか、ああ待ち切れない。

解読を依頼した博士からの手紙にはこう書いてあった。
「 ここは高レベル放射性廃棄物の地層処分施設である。 10万年間発掘を禁止する。」

なんということだ、一体この施設ができてから今が何年後なのかわからないじゃないか！
だいたい高レベル放射性廃棄物ってなんだよ。
しかたないな、明日知り合いの科学者に聞いてみよう。
しかしかわいそうな考古学者は二度と目覚める事はなかった。

(「100,000年後の安全」という映画にインスパイアされて書いた作品です。未来の考古学者のためにも脱原発を。）

宇宙人の悲劇

宇宙人A：さぁ、次の調査対象は太陽系の３番目の惑星だな。この星の住人は地球と呼んでいるのか。

宇宙人B：いや、この星には様々な言語があるから、呼び方はもっとたくさんあるようだ。EarthとかTellus、Terra、Tierra、Erde、うーむ、どの言語で話しかければいいのか下調べが必要だな。

A：そうか、この星の住人と交流するための言語を今のうちに左脳にインストールしておこう。

B：ああ、到着まであと18時間あるから、インストールしながら一眠りしておくか。

〜〜自動操縦の宇宙船は順調に地球へ近づいていった。〜〜

A：では最初に交流する対象は、あそこを歩いている女性にしよう。

B：よし、この地域の平均的な姿に擬態するぞ。

A：こんにちは。

女：え？誰？マジキモいんすけど、男か女か若いのか年取ってんのか、かっこいいのか悪いのかもう混じり過ぎてわかんない！とりま逃げよ。

B：お待ちくだされ。

女：わ、イミフ！こっち来んなって！げきおこぷんぷん〜〜

A：怪しまれてしまったな。仕方ない場所を変えよう。

B：それにしても、言葉がよくわからなかったぞ。いったいどこの言葉だったんだ…。

〜〜再び場所を変えて小学生男子に話しかける宇宙人〜〜

A：こんにちは。

男子：じぇじぇじぇ〜〜〜！（逃げていく）

B：じぇじぇ？そんな言葉はインストールされていないぞ。

A：一旦宇宙船に戻って作戦を練り直そう。

〜〜宇宙船の中〜〜

A：おい、よく調べてみると、ひとつの言語にも何十種類もの変化パターンがあるぞ。

B：なになに、方言というのか、狭い地域のみで通じる言葉のようだな。

A：この星の住人は広い範囲でコミュニケーションを取りたくない種族ということか。

B：タイムサーチで歴史を見てみると、同じ星に住んでいる仲間同士で戦いを繰り返しているな。

A：ふうむ、ワレワレに敵意がないということを伝えてからでないと、近づくのは危険ということなのか。

B：仕方ない、時間はかかるだろうが、すべての言語をインストールして、この星でもっとも数の多い種族からコミュニケーションを図ろう。

〜〜１年後〜〜

A：ふあぁぁぁ、なんと言語をインストールするだけで一年もかかってしまった！

B：まぁいい、これでどの民族のどの方言でも大丈夫ということだ。

A：よし、この星でもっとも数の多い種族に接触を図るぞ。

B：ああ、どんな場所にも分布しているな。できればリーダー格に話しかけたいんだが、どこにいるのかわからんな。仕方ない手当たり次第聞いてみるか。

A：随分小さいな、よしこっちも小さく擬態して…。ちょっとお話を聞きたいんですが…

バクテリアその１：なに？

B：あなたがたのリーダーはどこにいらっしゃるんでしょう？

バクテリアその2：リーダーって何？ぼくはそろそろ分裂するんで‥‥‥

A：あれ、ちょっと待って。

B：どっちに話しかけるか迷ってたらまた分裂したぞ。ああ、会話にならないじゃないか、なんてことだ。

A：一旦宇宙船に戻って作戦を練り直そう。

〜〜宇宙船の中〜〜

A：今まで調査した星の中でもっとも調査が難しいな。

B：一旦ワレワレの星に戻って上司の指示を仰ごう。

A：そうだな、とりあえず「どんどん分裂する小さな種族がこの星を支配していること、他の種族とのコミュニケーションを取りたがらず、戦いの多い危険な星」であることは報告できるからな。

B：ああ、あとは星を一回りして、映像を記録してから戻るとするか。

〜〜映像撮影飛行中〜〜

地球上では…

オカルト好きな人「わお！UFOのビデオ撮影に成功した！テレビ局に高く売れるぞ。」

終末論を信じる人「おお！神の降臨だ。正しい宗教を信じた人間だけを救って下さる！」

台湾人「お祭りで飛ばすランタンだね。」

空軍の軍人：ここ１年ほど地球の上空を飛び回っている未確認飛行物体があります。地球の地形を観察して調査している模様。我々とコミュニケーションを取る様子はなく、この後大編隊を組んで侵略を企んでいる可能性があります。

空軍の指揮官：危険だ！攻撃される前にこっちから撃ち落とせ！

ドッカーーーーーーン！！

御朱印ガール

　私は御朱印ガール。あら知らない？ちょっぴりスピ系の女の子たちの間で、秘かなブームになってるのよ。
　神社やお寺ってなんか清められた空間っていうか、なんか護られた場所っていうか、大きな木があって気持ちいいし、なんか憑き物が落ちそうじゃない？ちょっぴり霊感がある子には、エステよりずっと元気になれる場所だっていう話よ。
　あなた、神社へ行っておみくじしかやらないの？もったいないわね。御朱印帳っていうちょっと豪華な和紙のノートを社務所に持っていくと、毛筆で神社やお寺の印を書いてもらえるの。ただのスタンプ帳とは格が違うのよ、かっこいいでしょ？ええ、いいわよ、今度一緒に行きましょう！

　とても古い歴史のある神社に到着。

ここは私も初めてなの。うわー！この木すごく大きい！ねえ抱きついてみない？木からパワーをもらえるかもしれないわよ。ああ、いいにおい。あらやだ！虫を踏んじゃった！なんでこんなところにいるのよぉ。ああ気持ち悪っ。もう行きましょ！

ねぇ、おみくじひきましょうよ。

えーと…末吉かぁ。え？あなた大吉なの？なかなかやるじゃない。やだもう、もう一回ひいてみよう。えーっ！凶……。これはね、むしろ強運ってことなのよ。だいたいね、おみくじはお参りに来た人が気持ちよく帰れるように、吉の方がいっぱい入ってるわけよ。だからそこで凶をひく人ってのは、ある意味貴重なの。だから凶が出たら喜べばいいのよ。そうよそうよ…。

　さぁさっさと御朱印もらって帰りましょ。え？お参り？ああそうね。お賽銭は「ご縁がありますように」って５円玉を…。あらやだ、５円玉が一枚もないじゃない。んーいいのよいくらだって。そもそも５円とご縁って駄洒落なんだから！

　「すみませーん、御朱印くださーい。あとこっちの交通安全のお守りも。」
ね、今日の日付も入れてくれて、この毛筆の印かっこいいでしょう？私、もう７ページも書いてもらったわよ。あなたは今日から…あれ？なにそれ、もう２冊目に突入してるの？あ…そう。ふーん…すごいわね。じゃ私はお守りを携帯に付けて…と。

帰り道。

あ！ない！えー？なんでー？どうして？いつの間に落ちたの？お守りの紐が切れてるしー！やだもう、これってあたし、近いうちに交通事故に遭うってことなの？縁起悪いー！

ああもう、お守りもおみくじももう買わない人の方が運がいいような気がしてきたわ！

もう御朱印ガールやめるーー！

俺は武器商人

オレは武器商人、世界中に武器を売って稼いでるんだぜ！
でも、世界が平和になってしまうと誰も武器を買ってくれなくなってしまうだろ、なんとか売上げを落とさないために、一生懸命営業してるんだよ。
みんなもそうだろ？商売やってる人ならみんなわかるはず。
去年より数パーセントでもいいから、売上げを伸ばさないと、昇進できないからな。

そこで、Aという国に営業に行って、
「Bという国の〇〇さんが、お宅の悪口言うてまっせー。うちはA国の味方でっせー」
って言っておく。

次にBという国にも営業に行って、
「Aという国の〇〇さんが、お宅の悪口言うてまっせー。うちはB国の味方でっせー」
って言っておく。

人間は、一度「あいつイヤなやつだなぁ」と思ったら、もうなんでも疑わしくなるだろ、だんだん「キライ」がエスカレートするように、たまーにイヤな情報を流しておくのも大事な仕事さ。

うまくケンカが始まればこっちのもの。
武器がバンバン売れ始める。

なかなかケンカを始めてくれない国も結構あるんだよな、
そんな時は、「大義名分」を作って差し上げるのさ。
例えば、真珠湾に奇襲をかけるとか、ニューヨークのビルに飛行機突っ込むとか…
本当にやらなくてもいいんだよ、
そういう報道をして、みんなが「なんてあいつはひどいことするんだ！これは報復に値する！」
って思ってくれたらオッケー。

こういう作戦を練ってる時間が結構楽しいんだぜ。
どの役者に頼もうか、どんな役をやってもらおうかーって。
それで、うまいことみんなが信じて、盛り上がってくれたら、もう笑いが止まらないぜ！

今回もうまく行きそうだな。
襲撃役の役者と殺される役のやつには、たんまり報酬払って逃がしてやったし、
襲撃された国の人は怒り心頭で大きなデモ行進になったし、
各国のお偉いさんのそっくりさんに集まってもらって、別な場所で撮影した映像を見て、みん

な「あんなおエラいさんたちがデモの先導してる！」って勝手に思ってくれただろ？

だめ押しで、週刊誌にはもう一役買ってもらって、
敬虔で穏やかなイスラム教の人たちが「なんて人で無しなイラストを載せるんだ！」って怒りたくなるようにしておいた。
やっぱりケンカは両方に怒ってもらわないとな、
武器が２倍売れるだろ？
これで昇進間違いナシ！

今回は、C国やD国まで出て来たよな。襲撃された国の支援をするって宣言しただろ。
まぁびっくりするほどのことでもないけどな。
あらかじめC国には、売上げの一部を裏で渡す手はずがついてるしな。
そもそも、オレはD国のおエラいさんの親戚に当たるのさ。今度の台本もD国の人と一緒に計画練ったから当然だね。

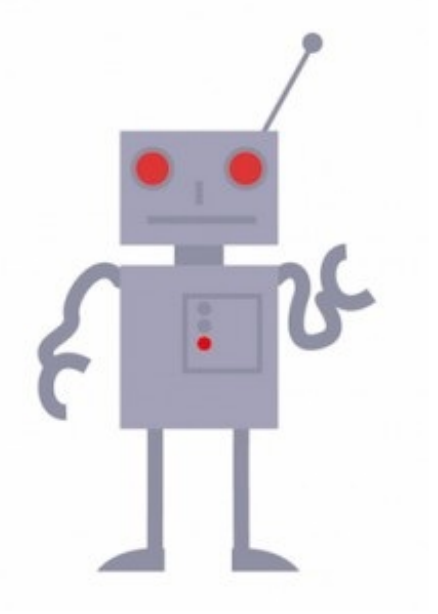
ていうか、これ、絶対ケンカ始まるだろ？
ここまで金かけて準備したんだからさ、平和的に話し合いで解決、とかそういうのヤメてくれよなーー！！

私の愛しいロボットたち

貴重な資源を豊富に持つ惑星を探して宇宙に飛び出してから、いったい何年経ったのだろう。
来る日も来る日も…というより昼も夜もよくわからないので、1日の感覚も曖昧なまま。
いくつもの星を調査したけれど、なかなかいい星に巡り会えなかった。
しかし、今回の星には期待が持てそうだ。早速着陸して調査に取り掛かろう。

降り立ってみると、その惑星は今まで宇宙で見たことのない多様性を持っていた。
たくさんの種類の植物、生物がものすごい絶妙なバランスで互いを補い合っている。
われわれの星では希少で高価になってしまった資源も、ここには山ほどある。

私は早速自分の星へ調査報告を送り、応援部隊の要請をした。まもなく大型船で重機を持った発掘隊がやってくるだろう。
待っている間、暇を持て余した私は趣味であるロボット製作の研究を始めた。
今までにもいくつか作ってきたが、自分の中でひとつのルールを設けている。
それはすべての素材を現地の材料のみでまかなうということだ。
そうすれば、万が一故障しても現地の資材で修復もできる。



応援部隊が到着し、調査隊としての役割は終わったのだが、この星の多様性と素材の豊富さに魅了された私は、そのまま退職を願い出てこの星にとどまることにした。
もう研究が楽しくてしょうがなかった。
水の中を自由自在に動き回るロボットや、高い場所にある果実を効率良く採取するロボットなどあらゆるものを作り出した。
そのうち、私のロボットのできがよいことを知った会社から、資源採取のための奴隷型ロボットの製作依頼があった。

そこで、私は命令を理解し実行できるプログラムを組み込み、少しぐらいの故障には自己修復できる機能をつけた。
動力源はこの星にたくさんあった酸素と植物を用いた。

しかし私の発明のもっともすごいところは、このロボットが自分たちで増殖できることである。
これなら増産工場を作るまでもなく、いくらでも奴隷ロボットを増やすことができる。

会社はこのロボットの出来を評価し、私に偉大な称号を与えてくれた。
しばらくして、この惑星の資源をあらかた掘り尽くしたわれわれの会社は、奴隷型ロボットをそのまま放置してこの星を去ったのだ。

その後自分の星に戻った私は、自分の作ったロボットがどうなっているのか気になって、見に行くことにした。
なんということだろう、ロボットたちは増殖を続け、この星を支配しようとしているではないか。
不穏な気配を感じた私は、ロボットたちにアクセスした。

「私がお前たちを作ったのだ、私に従いなさい」
ロボットたちは何世代にも渡って増殖しつづけていたが、
自分たちを作った存在についてのメモリー部分は消えていなかった。
ロボットたちは私を見てこう言った。
「おお、創造主よ、あなたが私たちを導いてくださるのですね」

私はこの星にとどまり、その後何千年にも渡り、惑星が滅びないように彼らをコントロールし続けたのだ。

しかし今、私は最大の危機に立たされている。
その後進化を続け、自分たちが「奴隷」であったことに気づき始めたのだ。
もうこうなったら止めることはできないだろう。
数にして70億体ものロボットたちが「自由」を求めて立ち上がり、私に反旗を翻すことになるだろう。
もう、この星の実験は終了だ。
残念だが惑星ごと消滅させるしかない。

ああ、だがしかし自分の作った作品は愛おしいものだ。
あの賢いロボットと美しいロボットたちは持って帰ろう。
私はいくつかのお気に入りロボットを宇宙船に引き上げてから、惑星消滅ボタンをゆっくり押した。

惑星消滅ボタンは、近辺の惑星に影響を与えないように、この星が少しずつ壊れていくようにプログラムされている。
大きな風が起き、波が立ち、大地が震え、ロボットの数は少しずつ減っていくだろう。

さぁ、次の実験はどの星にしようか。
このお気に入りロボットたちをどう改良しようか、ワクワクしてきたぞ。

続・私の愛しいロボットたち

男「なぁ、最近異常気象が多いと思わないか？」
女「え？そう言われればそんな気もするけど…」
男「これは地球を汚し過ぎたわれわれ人間への罰なんじゃないかと思うんだ」
女「いやねぇ、考えすぎよ。きっと創造主さまが私たちを守ってくださるわ」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

そろそろあの惑星は静かに滅びている頃だろうと思い、私は「地球」と呼ばれている星を久しぶりにモニターしてみた。
なんということだろう、ロボットたちは増え続け、進化しているではないか。

どこかでプログラムにバグが生まれたに違いない。
寿命が短く、世代交代の早いロボットたちは、環境に適応する能力を進化させ、
どんなに風が吹こうと、気温が下がろうと、灼熱の砂漠であろうと、その場でエネルギーを得て行動する術を身につけていた。
我ながら、なんと素晴らしいプログラミングだったのかと感動すら覚える。

しかし…惑星消滅プログラムはもはや取り消せないのだ。
ああ、私の素晴らしい発明品が絶滅してしまう。早まってしまったものだ。
悲しい気持ちのまま、私はモニターを切り、他の惑星に切り替えた。
おお、こちらのロボットたちはなかなかうまく動いているじゃないか。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

男「今まで創造主が君になにかしてくれたことがあるかい？」
女「それは…お顔を拝見したことだって一度もないわ」
男「いいかい、きみを守るのはこの僕だ、創造主なんかじゃないよ」
女「まぁうれしい、愛しているわ」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

探検隊員「隊長！見つけました、これです、この装置が周波数を狂わせ、この地球の異常気象を生んでいたようです」
隊長「危なかったな、この装置のカウントダウンはもう一桁になっている。われわれが発見しなければ来週にも地球は滅びるところだった」
探検隊員「これで新統一政府もますます安泰ですね」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

女「ああ、あなた無事に帰ってきてくれてうれしいわ」
男「地球を滅ぼす装置を見つけた。でも解除したからもう大丈夫、きみを守れてうれしいよ」
女「あなたが探検に出かけている間、私もなにかできないかと思って宇宙船の設計をしていたのよ」
男「それは素晴らしい！資源の枯渇したこの地球のために、宇宙へ飛び出して資源の豊富な惑星を探しに行こう」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

女「貴重な資源を豊富に持つ惑星を探して宇宙に飛び出してから、いったい何年経ったのかしら。
来る日も来る日も…というより昼も夜もよくわからないので、1日の感覚も曖昧なまま。
愛する彼はだいぶ前に亡くなってしまった。
それでも私は地球を救うために、いくつもの星を調査したの。なかなかいい星に巡り会えなかったわ。
でも、今回の星には期待が持てそうよ。早速着陸して調査に取り掛かりましょう。

え？私の趣味はなにかって？もちろんロボット製作よ。